

2026 年度 一般選抜前期日程 [看護学部] 小論文 (図表理解)
出題の意図と解答の傾向

問題

【出題の意図】

我が国では、悪性新生物（がん）は、1981年以降、死因の第1位であり、現在も年間約38万人が死亡している。日本人が生涯のうちのがんと診断される確率は、男性・女性ともにおおよそ2人に1人と推計されており、がんは誰にとっても身近な疾患となっている。そうした状況の中、がんを発症してから治療するだけでなく、早期の段階で発見し適切な治療につなげる対策として、がん検診の重要性はますます高まっている。すなわち、がん検診は個人の健康管理にとどまらず、社会全体としてがん検診の受診率を高め、がんによる死亡を減らす重要な取り組みの一つである。厚生労働省は、生活習慣に留意するとともに、適切な年齢および適切な受診間隔でがん検診を受診し、がんを早期に発見して適切な治療につなげるために、がん検診の受診率60%以上を目標として受診を推進している。

看護職は個人へのケアのみならず、地域や社会における健康課題を理解し、その解決に向けた取り組みに関わる専門職である。そのため、看護職を目指す受験生には、我が国の健康課題を理解し、その課題解決に向けた対策を考察する力が求められる。本試験では、厚生労働省や内閣府などの公的機関が公表するがんに関する情報を読み取り、それらの情報をもとに、がん検診受診率向上のために必要な対策について、自らの考えを述べることができるかをみることを目的として出題した。

<設問1>

【解答のポイント】

設問1は、死亡率および医療費の年次推移を示した図表をもとに、がんの現状を多面的に読み取る力を問うものである。がんは主要な死亡原因であり医療費の面でも重要な健康課題の一つである。受験生には、死亡率と医療費という二つの指標の年次推移や他疾患との比較を通して、がんが我が国においてどのような位置づけにあるのかを理解し、その特徴を記述することが求められる。

図表1「主要死因別死亡率の年次推移」には、がん、心疾患、脳血管疾患などの死亡率の推移が示されている。この図表からは、1950年から1980年頃までは脳血管疾患や結核の死亡率が高かったが、1981年以降は現在に至るまで、がんが死因の第1位となっていることなどを読み取り、記述できることを期待した。

図表2「主な疾患の医療費の推移」には、がん、心疾患、脳血管疾患、肺炎の医療費の推移が示されている。この図表からは、がんの医療費は他の疾患と比較して高い水準であること、2013年度から2022年度までの10年間で増加していることなどを読み取り、記述できることを期待した。

【解答の傾向】

多くの受験生は、がんの死亡率や医療費が高いことについては記述できており、全体として、図表から基本的な情報を読み取ることは概ねできていた。しかし、複数の視点から読み取り、整

理して記述できている答案は多くはなかった。特に、2番目に高い心疾患など他の疾患と比較した記述は十分とはいえなかった。また、現在の死亡率や医療費の状況のみ、あるいは、年次推移のみ記述した答案も散見された。図表を多面的に読み取り、その内容を300字の字数制限の中で適切に整理して記述する力が求められる。

図表に示されていない生活習慣や医療技術の発展にまで言及する答案もみられた。また、図表の数値や順位を具体的に示さず、抽象的な表現にとどまる答案も一定数みられた。さらに、単位の誤表記(例:人口10万対の死亡率を%で表記するなど)も散見された。設問の趣旨に沿って、図表から数値や傾向を正確に読み取り、それを根拠として記述することが重要である。

悪性新生物(がん)に着目した出題であったが、脳血管疾患や肺炎など、主題から逸れたデータを中心に記述した答案もみられた。何が問われているのかを理解し、どのデータに着目する必要があるのかを意識して、各図表を読み取ることが重要である。日頃から統計資料や図表に触れ、データを根拠として分析的に読み取る習慣を身につけることが望まれる。

<設問2>

【解答のポイント】

設問2では、がん検診受診率の推移(男女別)、がん検診受診率の国際比較、がん検診の受診理由および未受診理由を示した図表をもとに、日本におけるがん検診の現状と課題を多面的に読み取り、その対策を考察する力を問うものである。受験生には、設問1で示されたがん死亡率や医療費の推移を踏まえ、がんが我が国において重要な健康課題であることを理解したうえで、がん検診の受診率の状況や国際的な位置づけ、受診や未受診理由など、複数の図表から得られる情報を統合して日本におけるがん検診の課題を把握することが求められる。すなわち、設問1で示された「がんによる健康課題の重要性」と、設問2で示された「検診受診率の状況や受診行動の要因」を関連づけて考察することが重要である。さらに、課題解決に向けた方策について、図表から得られる情報を根拠として、具体的かつ論理的な対策を考察し、記述する力が求められる。

図表3「がん検診受診率の推移(男女別)」には、男女別に胃がんや肺がんなどの各種がん検診の受診率の推移が示されている。この図表からは、2013年から2022年にかけて、男女ともにがん検診受診率は上昇傾向にあるものの、男性の肺がん検診を除き受診率は50%に達していないこと、また、全体として男性よりも女性の受診率が低いことなどを読み取り、記述できることを期待した。

図表4「乳がん検診および子宮頸がん検診受診率の国際比較」には、日本と他国のがん検診受診率が示されている。この図表からは、アメリカやフランスなどでは受診率が70%を超えているのに対し、日本は40%台にとどまっており、図表に示された6か国の中で日本の受診率が最も低いことなどを読み取り、記述できることを期待した。

図表5「がん検診の受診理由」および図表6「がん検診の未受診理由」は受診行動に影響する要因が示されている。受診理由としては、「身近な人のがんの罹患」「職場や学校、家族や医療者からの受診のすすめ」「広報」などが挙げられており、これらはがん検診受診行動を促進する要因となる。一方、未受診理由としては、「いつでも医療機関を受診できる」「経済的な負担」「時間がない」「健康に自信がある」「検査に対する不安」などが挙げられており、これらはがん検診受診行動を阻害する要因となる。これらの図表からは、がん検診の知識や必要性が十分に理解されていないことや、経済的負担や時間的制約などの受診の障害により、受診行動につながっていない

ない状況が読み取れる。これらの図表を関連づけて、がん検診の受診率向上のための対策として、検診の意義や検査内容に関する「知識や意識の向上を図る」、費用や時間など受診環境を整える「受診の障害を除去する」、受診のお知らせなどの受診勧奨による「受診のきっかけを提供する」を踏まえた対策を具体的かつ論理的に記述できることを期待した。

【解答の傾向】

多くの受験生は、がん検診受診率の推移や、日本のがん検診受診率が国際的にみて低いこと、また未受診の理由として時間的制約や費用負担、不安などがあることを指摘していた。全体として、図表から基本的な情報を読み取ることは概ねできていたが、複数の図表を関連づけて課題を整理し、対策まで論理的に説明できた答案は多くなかった。

図表の内容を個別に説明するにとどまり、図表相互の関連を踏まえた記述が十分でない答案が見られた。また、がん検診の課題が明確に示されていないものや、設問1で示された死亡率や医療費の現状を踏まえた記述がなされていないもの、さらに図表5・6を活用せずに対策のみを述べている答案なども散見された。本設問では、設問1の内容を踏まえながら複数の図表を関連づけて読み取り、日本におけるがん検診の課題と対策を説明することが求められている。

対策については、「広報」や「周知」などの表現にとどまり、具体性に欠けるものが多く、受験生自身の視点や工夫が盛り込まれた答案は多くなかった。また、少数ではあるが試験時間内に記述を終えることができなかった答案も見られた。さらに、500字の字数制限の中で図表の読み取りに関する記述がほとんどない答案や、反対に対策の記述がほとんど示されていない答案も見受けられた。試験時間の配分に留意するとともに、論理展開や文章構成を意識した記述が重要である。

その他、誤字（例：がん健診、医療の進保など）や脱字も散見された。また、図表番号が明記されていない答案や、図表を「図」や「資料」と表記した答案も複数見られた。示された図表の内容を正確に読み取るだけでなく、図表に示された語句や単位などの表記にも注意して記述することが求められる。日頃から社会問題に関心を持ち、統計資料や図表を読み取りながら自分の意見を整理し、論理的に表現する力を養うことが重要である。